

西行の研究

窪田章一郎著

窪田章一郎 著

西行の

西行の和歌についての研究

東京堂出版

© 窪田章一郎 1961.

明治41年生。昭和8年早稲田大学文学部国文科卒。昭和35年文学博士。
〔現在〕早稲田大学教授〔専攻〕和歌史〔著作〕『古今和歌集』（日本評論社）『西行研究』（八雲書林）『現代秀歌戦後』（春秋社）



昭和三六年一月一〇日
昭和四四年一〇月一〇日
初版発行
六版発行

西行の研究

定価 三五〇〇円

著者 窪田章一郎
窪田章一郎 東京都千代田区神田錦町三ノ五

発行者 岩出貞夫
岩出貞夫 東京都港区芝三田豊岡町八

印刷者 川口央
川口央 東京印刷株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版
東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三ノ五

電話 東京 (291) 八二六―七
振替口座 東京 二七〇

緒 言

わたくしは歌人西行の研究を試みるに当たって、つぎのような心組みをした。(一) いかなる時代に、(二) いかなる人が、(三) いかなる状態で、どのような心を持ち、(四) いかなる態度で、(五) どのように表現したか。そして、(六) どのように他から受け取られたか、という諸点を、総合的に理解してみようと思った。

この心組みのもとに、この研究は、つぎのような構成をとった。その解説をもって、緒言としようと思う。

第一篇「著作」(序章―第八章)では、研究の基礎資料となる西行の著作についての考察を行なった。『山家集』、『聞書集』と『聞書残集』、『異本山家集』、『山家心中集』、『御裳濯河歌合』、『宮河歌合』、『西行上人談抄』について、諸伝本の文献的考察と、それぞれの著作の形態・成立の考察、そして特に文学的価値という点からの特色を考察しようとした。

第二篇「生活と作歌」(序章―第六章)では、西行の生涯を五期に区分し、各期について、社会的環境と個人的環境とを考察し、いかなる時代に、いかなる状態で生活したかということ、および、作歌年代の判明するもの、また確実と推定される歌との関連を、考察の課題とした。西行の作歌は古代末期の宮廷歌人とは異なった自由な生活環境をもち、作歌と生活とが結びついているところに特色があったから、この課題は成立しうるものであった。西行の伝記は不明な点をもっているが、本篇では作品を資料として、いかなる心をもって生きたかという内側からの考察を行なうて、伝記を確かめようとする意図と、歌人としていかなる態度を樹立したか、その歌境がどのように展開したかとい

う文学のあとづけをしようとする意図とがあつた。なお、序章では、家系・家族、作歌にはいる前の成長期の教養面について概説した。

第三篇「態度」(第一章～第八章)では、都の歌界の圏外にいて、作歌を生涯の為事とした西行にとって、特に作歌態度の確立が必要であつたという見地から、『西行上人談抄』その他の乏しい資料によつて、いかなる態度で作歌したか、という点を考察した。第二篇の考察で得たもの、第四篇・第五篇の考察の結果をも用いて、門下である蓮阿の聞書、その他の記録を、できるだけ客観性をもたせる意図のもとに、判断し、考察した。資料は歌話の記録されたものの範囲にとどまるが、この篇で行なわれた考察は、第四篇を中心とする諸篇の作品についての研究によつて、補われてゆくべきものである。

第四篇「作品」(序章～第一章)では、西行の全作品にわたつて、その特質の考察を試みようと思つた。第二篇では、縦の關係で、年代の判明する作品を資料としたが、ここでは縦の關係とともに、横の關係をも考慮に入れた。序章では、西行の作歌に関する諸条件を考察し、第一章以下、春・夏・秋・冬・恋・羈旅・離別・賀・哀傷・神祇・釈教・雑・連歌という順序で、一〇章に分類した。考察の方法としては、出家直後の頃の初期の作品である百首歌と、晩年の自選歌集ともいふべき『御裳濯河歌合』と『宮河歌合』との二つを、連歌を除く各章で適当に分割して、発足点と到達点との作歌態度・作品の境地を比較・考察し、そのうえで、その他の必要と考えられる諸作品を採り上げることとした。第一章の「結語」は、その結果の要約である。

第五篇「受容と批評」(第一章～第六章)では、西行の作品が、生前・没後に、どのように受け取られたか、という点を課題とした。西行の特殊性をもつ歌が、新古今時代前後の都の歌界で、いかに評価されたかということが、問題の中心点となる。俊成による『御裳濯河歌合』の判詞、定家による『宮河歌合』の判詞、それに関連のある西行の『贈定家卿文』を資料として、私的関係における俊成・定家の評価の事情を考察することができる。また、俊成による『千

載集』の入集歌、後鳥羽院による『新古今集』の入集歌、定家による『新勅撰集』の入集歌は、勅撰集という公的関係における評価の事情を考察する資料となる。西行の晩年から没後にかけての約五〇年間は、新古今時代をはさむ和歌史上の重要な時期であるが、西行の作品がこの時期に、俊成・定家・後鳥羽院という代表歌人によって、いかに受容され、批評されたかという点を考察しようと試みた。西行のこれらの評価は、歌人としての地位を決定したが、その状態が、西行の文学と本来いかなる関係をもつかということをあわせて考察し、その全体を理解しようと意図した。

第六篇「結語」(第一章・第三章)では、以上の諸考察の結果をまとめて、公的性格と私的性格との二点から要約した。なお、第五篇の「受容と批評」は、新古今時代前後に限定されたので、本篇の第二・第三章で、西行の作品の本質的なものが、和歌史上、および戦後の現代において、いかなる意義をもつかについて私見を添えることとした。

以上が、この研究の構成の解説である。おわりに、わたくしの研究態度について一言したい。すべての古典は、その成立した時代に、いかなるものであったかという特殊性をもっているが、それと同時に、すぐれた作家・作品は、その特殊性を乗り越えて現代に生きる、文学としての普遍性をもっている。特殊性の理解は、文学史研究の興味ある課題であるが、その研究的興味を支えているものは、現代に生きている文学としての意義を理解したいと思う興味である。この二つの関係を総合的に理解しようと思う心が、わたくしの研究態度となっている。文中に、現代的意義について特に触れるところのない場合も、作品の理解・批評・鑑賞は、立場をここに置いているつもりである。以上を緒言とする。

目 次

緒 言

第一篇 著 作

序 章 文献学的成果について……………三〇

第一章 山家集……………二四

1 山家集の諸本……………二四

2 山家集の形態……………二七

3 山家集の編纂にはたらいた意図……………二六

4 山家集の成立、および価値……………三三

第二章 聞書集と聞書残集……………三六

1 聞書集の形態と成立……………三六

2 聞書集の価値……………三七

3 聞書残集の形態と成立……………三九

4 聞書残集の価値……………四二

第三章	異本山家集	四三
1	異本山家集の諸本、および伝来	四三
2	異本山家集の形態	四四
3	異本山家集の編纂にはたらいた意図	四六
4	異本山家集と御裳濯河・宮河歌合、および諸勅撰集との関係	四五
5	異本山家集の成立、および価値	五七
第四章	山家心中集	六〇
1	山家心中集の形態と成立	六〇
2	山家心中集の価値	六二
第五章	御裳濯河歌合	六三
1	御裳濯河歌合の成立	六三
2	御裳濯河歌合の形態と価値	六七
第六章	宮河歌合	六八
1	宮河歌合の成立	六八
2	宮河歌合の形態と価値	七三
第七章	西行上人談抄	七三
1	西行上人談抄の諸本	七三

第八章 結 語

2	西行上人談抄の編者と成立	六
3	西行上人談抄の価値	六
1	勅撰集・私撰集その他の初出歌	七
2	現存総歌数	八
3	西行の諸歌集の特色	八
4	追補——新発見の歌四首——	八

第二篇 生活と作歌

序 章	六
-----	---

第一章 第一期	一〇三
---------	-----

1	生涯の時代区分	八
2	家系・一族	九
3	母系、および教養	九
4	妻 子	九
1	出家の文学的意義	一〇三
2	和歌の伝統・作歌の発足	一〇五
3	作歌環境と作品の所在	一〇

第二章 第二期

4	鳥羽院・出家関係の歌	一一三
5	崇徳院関係の歌	一一九
6	出家直前の心境歌	一二三
7	第一期の推定歌	一二七
8	結語	一二九

1	作歌環境と作品の所在	一三三
2	出家直後の寺院・草庵関係の歌	一三七
3	述懐歌	一四三
4	法華経廿八品和歌	一五〇
5	百首歌の成立と「述懐十首」	一五四
6	作歌サークル——大原三寂・待賢門院の女房たち・覚雅——	一五九
7	初期の旅	一六九
8	結語	一七二

第三章 第三期

1	作歌環境と作品の所在	一七四
2	初度陸奥の旅	一八四
3	保元の乱と西行、および鳥羽院関係の歌	一九六

第四章 第四期

4	崇徳院と讃岐往来歌	二〇三
5	徳大寺関係の歌	二〇九
6	哀傷歌、および出家を勧める歌	二二三
7	宮廷歌会との交渉——貝合・虫合の歌の代作——	二二三
8	作歌サークル——大原三寂・顕広・西住・待賢門院の女房たち——	二六六
9	西国の旅、および大峰入	二四〇
10	結語	二五〇

1	作歌環境と作品の所在	二五五
2	四国の旅	二五九
3	皇室関係の歌	二七七
4	皇族関係の歌	二六一
5	平氏関係の歌	二六七
6	作歌サークル 一——西住の死——	二九〇
7	作歌サークル 二——大原・高野——	二九四
8	歌界との交渉	三〇二
9	高野山関係の歌	三〇九
10	「恋百十首」について	三二三

11	結語	三七
第五章	第五期	三〇
1	作歌環境と作品の所在	三〇
2	伊勢関係の歌 一——大神宮・公卿勅使・斎宮・神官サークル——	三七
3	伊勢関係の歌 二——菩提山の上人・草庵生活——	三三
4	戦乱期の歌	三七
5	「花の歌十首」について	三三
6	再度陸奥の旅	三六
7	「たはぶれ歌」について	三四
8	千載集編纂期の問題、および明恵との交渉	三九
9	御裳濯和歌集について	三四
10	結語	三七
第六章	結語	三七
1	伝と作品	三七
2	社会的地位	三七
3	作歌態度の確立	三七
4	新境地開拓の条件	三七
5	歌境の展開	三七

第三篇 態度

第一章	西行上人談抄の内容	三六三
-----	-----------	-----

第二章	作歌の態度	三六四
-----	-------	-----

1	歌の姿について	三六四
---	---------	-----

2	古今集の「雑歌」について	三六五
---	--------------	-----

第三章	「もととすべき歌」について	三六一
-----	---------------	-----

1	古今集の歌	三六一
---	-------	-----

2	古今集以後の歌	三六五
---	---------	-----

第四章	「すぎ」と「ごころざし」について	三六八
-----	------------------	-----

1	「すぎ」について	三六八
---	----------	-----

2	「ごころざし」について	四〇〇
---	-------------	-----

第五章	姿の問題	四〇三
-----	------	-----

1	「よせ」の否定と肯定	四〇三
---	------------	-----

一	「よせ」の否定	四〇二
---	---------	-----

二	「よせ」の肯定	四〇四
---	---------	-----

2	平凡と非凡について	四〇五
---	-----------	-----

3	姿を成立させる諸条件	四〇八
---	------------	-----

第六章	風体について	四三
第七章	諸書の歌話断片	四二五
第八章	結語	四一九
第四篇	作品	
序章		四二四
1	和歌の分類	四二四
2	和歌の発想形式と発表形態	四二九
3	西行の歌の分類	四四〇
4	西行の歌と素材	四四二
第一章	春の歌（四季歌Ⅰ）	四五五
1	百首歌中の「花十首」	四五五
2	御裳濯河・宮河歌合の桜の歌	四五九
3	定数歌、その他の桜の歌	四六五
4	御裳濯河・宮河歌合、その他の春の歌	四七八
第二章	夏の歌（四季歌Ⅱ）	四八四
1	百首歌中の「郭公十首」	四八四

第三章

秋の歌（四季歌Ⅲ）

2	御裳濯河・宮河歌合の郭公の歌	四八七
3	御裳濯河・宮河歌合、その他の夏の歌	四九〇
1	百首歌中の「月十首」	四九四
2	御裳濯河・宮河歌合の月の歌	四九七
3	その他の月の歌	五〇四
4	御裳濯河・宮河歌合、その他の秋の歌	五二二

第四章

冬の歌（四季歌Ⅳ）

1	百首歌中の「雪十首」	五三二
2	御裳濯河・宮河歌合の雪の歌	五三四
3	御裳濯河・宮河歌合、その他の冬の歌	五三七

第五章

恋の歌

1	百首歌中の「恋十首」	五三九
2	御裳濯河・宮河歌合の恋の歌	五四三
3	西行の恋の歌の作歌時期とその歌境	五四四
一	歌合の題詠について	五五五
二	「恋百十首」について	五五七

	三	恋の歌の作歌時期について……………	五二
	四	恋の歌の境地について……………	五三
	第六章	羈旅・離別の歌……………	五七
	1	御裳濯河・宮河歌合の羈旅・離別の歌……………	五七
	2	その他の羈旅・離別の歌……………	五八
	3	九州の旅について……………	五九
	第七章	賀・哀傷の歌……………	五八
	1	百首歌中の「無常十首」……………	五八
	2	御裳濯河・宮河歌合の賀・哀傷の歌……………	五九
	3	哀傷の歌の物語性……………	五九
	第八章	神祇・釈教の歌……………	五七
	1	百首歌中の「神祇十首」・「釈教十首」……………	五七
	2	御裳濯河・宮河歌合の神祇・釈教の歌……………	五八
	3	その他の神祇・釈教の歌——「地獄絵を見て」について——……………	五九
	第九章	雑の歌……………	六〇
	1	百首歌中の「雑十首」……………	六〇
	2	御裳濯河・宮河歌合の雑の歌……………	六〇

第一〇章 連 歌

3	その他の雑の歌	六二
---	---------	----

1	連歌の環境と作品の所在	六九
---	-------------	----

2	連歌の文芸性	六三
---	--------	----

一	兵衛の局との連歌	六三
---	----------	----

二	顯広との連歌	六五
---	--------	----

三	寂然・静空・西住との連歌	六六
---	--------------	----

四	寂然との連歌	六六
---	--------	----

3	結 語	六〇
---	-----	----

第一章 結 語

1	作歌の出发点——百首歌について——	六三
---	-------------------	----

一	作品の伝来と従来の評価	六三
---	-------------	----

二	百首歌の文学的価値	六四
---	-----------	----

2	作歌の到達点——両宮歌合について——	六六
---	--------------------	----

一	作歌年代の推定と選歌方針	六六
---	--------------	----

二	両宮歌合の文学的価値	六七
---	------------	----

3	歌風の特質	六七
---	-------	----

一	発想形式	六七
---	------	----